
バーサスゴッド・オフライン

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサスゴッド・オフライン

【Nコード】

N8194Y

【作者名】

久保田

【あらすじ】

VRMMORobotアクションRPG『バーサスゴッド』。青野 菜月とその仲間達は、いつものようにゲームをプレイしていた。しかし、軽い気持ちで選んだ選択が、彼女達を戦いの深みへと連れて行く。そこは異世界、香るは硝煙。

一話目にして絶体絶命（前書き）

新連載です。

感想、評価、誤字脱字のご指摘などがありましたら、お気軽にどうぞ。

一話目にして絶体絶命

彼女の姿を見る者があれば、その身に纏った雰囲気にも声をかけるかもしれない。知り合いなら飯の一つでも奢るかもしれない。それだけ全身から切なげな、諦めの空気が滲み出ていた。

しかし、その姿を見る者は誰もいない。身体のラインが浮き出たブルーのパイロットスーツを縛り付けるように、二重のベルトで固定されている。

このベルトをするたびに身を守られていると考えるよりも、自分を逃がさないためのベルトだと彼女はいつも思う。

またも腕も伸ばせないほど狭苦しく、配線とコンソールに囲まれた真つ暗なコクピット。身体の左右に配置された操縦桿を握り潰そうとしているかのように、思い切り両手に力が入っている事に気付いた。

「リラックス……リラックス」

こんな風に呟いた所で意味はない。そうわかっていても言わずにはいられない。意識して、両手の握りを緩めていく。

『なっちゃん、大丈夫？』

「大丈夫。何とかいけそう」

頭の右斜め上に繋がったという感覚が通る。鼓膜を震わせる感覚もなく、僅かにノイズを含んだ音が意識を通る感覚には未だに慣れない。

これは一体、どういう技術なんだろう？といつもと同じ疑問を浮かべながら、青野 菜月は言葉を返した。

「きーちゃんこそ大丈夫？」

無駄な言葉だな、と思いながら、菜月は言った。　きっと彼女は斎藤きいろはいつもの無表情をほんの僅かだけ笑みの形に歪めているのだろう。

それがわかっていても、中学生のきいろに気を使わせ続けるのは、ほんの少しだけ残っている菜月のお姉さんとしてのプライドが許せなかった。

『ん、問題ない』

「よし、じゃあ機体立ち上げちゃおうか」

『ん』

七つあるコンソールを、順番に叩くようにしてセツトアップを開始。　始めは立ち上げるだけで苦勞していたが、今は目をつむっていても出来る。

それだけの事はしてきたし、それはきっと自分の力になっているはずだと菜月は信じようと思った。

コクピットに明かりが灯っていく。

前後左右に取り付けられたモニターが、外の景色を映し出す。

操縦桿で機体を操作し、立ち上がらせれば、視線の高さには杉によく似た木々の頂点。

少し高所恐怖症の気がある菜月からすれば、この高さは身が竦む。

「そついえば赤矢は？」

モニターに小さくきいろのバストアップの映像が映る。　長いサ

ラサラの黒髪に、人形のように整った顔。しかし、への字に結ばれた口元が人形のような印象を裏切っている。

きいろの淡いイエローのパイロットスーツ。きいろの綺麗な身体をラインを浮かび上がらせ、非常に羨ましい。この胸についている不格好な塊は、あまり綺麗なラインを作ってはくれないのだ。

「ああ、兄さんなら」

「さあ、皆さんこんにちは！」

きいろの声を遮るように、ハイテンションな男が映し出された。普段着なら悪趣味としか言いようのない、キラキラ光るラメ入りのスーツが目につく。

「バーチャルリアリティ技術はついにここまで来た！発表当初から、そう言われ続けて早三年。まだまだ当社がナンバーワン！これからもウロボロス社の誇るVRMMORPGアクションRPG『バーサスゴッド』ご贖願お願いします！」

マイクの音量が最大になっているのか、狭いコクピットに自画像がぐわんぐわんと響く。

言っている事は確かに間違っている。ゲームセンターなどに設置された大型筐体売り上げランキングは、三年連続一位を達成している。

そのあまりの人気は、約一億円もする筐体を自宅に導入した猛者を産み出すほどだ。

後続のゲームを発表から三年経った今も上回る、圧倒的なまでに美しいグラフィックと、リアリティのあるロボットバトルは普段、ゲームをしない菜月もきいろに誘われて、始めてしまえばハマってしまうほど。

「今月もやってまいりました。 Aランク昇格戦！」

多くはないお小遣いから、一回五百円を捻り出してやっとここまで来た。

初心者狩りに弄ばれ、同格の相手にボロ負けして、何度やめようかと思つたかわからない。 しかし、それでも菜月はこの場にいる。その事だけは、しっかりと自分を認めてあげようと思つた。

「ルールは簡単！ 最大三人までのチームで、八チームでのバトルロイヤル。 最後に生き残つたチームがAランク昇格です！」

まあそれはともかく負けても仕方ないよね、と菜月は思い直した。肩からふつと力が抜ける。

Fランクから始まり、Cランクまではするすると上がる。 Bまでは努力次第で何とでもなる。

しかし、Aランクはこの月に一度のバトルロイヤル形式の昇格戦を勝ち抜かなければならないため、途端に難易度が跳ね上がり、万年Bランカーチームは大量にいる。 単純計算で八分の一。

しかし、単純な腕だけではなく、他のチームから狙われないようにする立ち回りも必要になってくる。

「きーちゃん、最初は目立たないように様子見しようね」

菜月の言葉に、きいろはそつと目を逸らした。

「……何そのリアクション。 って赤矢はどこ！？」

司会者の言葉で中断されていた問いを思い出した菜月は、辺りを慌てて見回す。

木々に囲まれた中でも、それは非常にわかりやすい。煙突のよ
うに長い、木々の上に筒先が飛び出るほどに長大な大砲を空に向け、
どう見ても分厚い鈍く輝く銀色の装甲を持った戦車。きいろの機
体だ。

「赤矢はどこに行ったの!？」

嫌な予感がした。普通にログインしているはずなら、同チーム
は視界の届く範囲に配置される。しかし、辺りを見回してももの機
体しか見当たらない。

「兄さんなら……」

「ちょっと回線乗っ取らせてもらっぜい」

司会の姿がプツンと切れると同時に、新しい映像が浮かび上がる。
真っ赤な髪と鋭い目つきがやたらと印象に残る男の姿。まだ肉
付きのしっかりしていない肩には、学生服を羽織っている。

ただでさえ明らかにタチの悪そうな顔付きだというのに、更に不
愉快なにやにやとした笑いが乗り、一目見て彼と進んで付き合いを
持とうとする者はなかないだろう。
しかし、

「何やってんのよ、あんた!？」

斎藤赤矢のチームメイトにして、幼なじみでもある青野 菜月か
らしてみれば放っておけるような状況ではない。

「よう、菜月。 ちょっと黙ってる」

「あ、このバカ!？」

赤矢の特技はゲームとハッキング。完全に回線に乗っ取った赤矢は、菜月の通信回線を切ってしまった。

きいろとの通信も出来ず、菜月に出来る事は赤矢の暴挙を、ただ黙って見ている事しか出来ない。

「Aランク昇格戦に参加のクソの皆様、こんにちは！ 本日は我々、チームSUNZU Riverのためにお集まりくださり、誠にありがとうございます！」

赤矢の挑発的な演説が始まった。耳を塞ぎたい気持ちを抑え、必死に機体のセッティングを変更していく。

手にしていた機体全体を隠せるような巨大なシールドを、背中にマウント。きいろの戦車もすでに砲身を水平に戻した。垂直から水平まで動く、現実の戦車では有り得ない砲身だが、そんな事を気にしている暇はない。

「今からワタシ達、SUNZU Riverの虐殺ショーを始めさせていただきます」

破壊力を重視したバズーカから、弾数だけはい多いマシンガン二丁へと変更。近接戦闘用のサーベルをマシンガンの予備弾倉へ。

カウント3。長い付き合いは、この後の展開を菜月にたやすく予想させる。

「それでは貴様らがおつ死ぬまでの短い間、存分に楽しみやがってください」

カウント0。いきなりのゲームスタート。セッティング変更

は唐突に打ち切られた。

「きーちゃん！」

「うん」

通信回線が復活。 自分の機体をきいろの砲塔の上に、膝立ちの姿勢で載せる。

すでに暖機を始めていたきいろの戦車は即スタート。 キャタピラの代わりにホバー方式の戦車は、初速は遅いが一度走り始めれば二足歩行の機体とは比べ物にならないほどに速い。

「行くよ、シルバー」

菜月の機体を乗せたせいで、普段より鈍い加速となったきいろの機体、シルバー号が動き始めた。 そのじりじりとした加速は菜月の焦りを生むが今更、降りるわけにもいかないし、菜月独りで逃げるつもりもない。

「来た！」

菜月の機体のレーダーに反応。 赤矢の挑発のせいで、全方位から、

「ミサイル！ えっと……… 凄い沢山！？」

空を埋め尽くすような、木々にぶつかるたびに爆発し、その爆発の後ろからも大量に。 上からも横からも、数え切れないほどのミサイルが飛んで来る。

「赤矢のバカあ!？」

「バカとはなんだ! あ、筐体に入るまで、あと五分くらいかかるから頑張って生き残れよな」

赤矢ののん気な言葉に耳を貸す事なく、菜月は両手に持ったマシンガンで、シルバー号の後ろから迫るミサイルをとにかく撃ち落とす。射撃はあまり得意ではない菜月だが、とにかく撃てば当たるほどの数が飛んでくる。

きいろも砲塔の横に取り付けられた二門の機銃を乱射しているが、まったく間に合っていない。

「きーちゃん、もう無理い!？」

「なっちゃんは諦めが早い。しっかり掴まって」

全方位から迫るミサイルは一瞬にして、二人の対応力を飽和させる。しかし、ハンドルを大きく切ったシルバー号は、その大きな尻を思い切り振った。

「正面、撃って」

「わかったあ!」

きいろの冷静な声に、菜月は泣きそうになりながらも、反射的に従う。直撃ギリギリの距離まで近付いていたミサイルを撃ち落とせば、至近で爆発。

その爆風は尻を刺された馬のように、シルバー号を加速させる。速度と頑丈さを兼ね備えた走りは、通った跡をハリケーンでも起きたとは思えない有り様に変える。木があろうと岩があろうと、

突っ込めば砕けるのだ。

「うわぁ！？ 腕が吹っ飛んだよ！」

「二人とも粉々になるよりはマシ」

爆風に巻き込まれた菜月の機体はマシンガンが高熱に炙られ、中の弾薬が爆発。 右腕と正面装甲の一部が破損。

それに比べて、遥かに厚い装甲のシルバー号は、僅かに煤に汚れただけだ。

何となくやり切れない物を感じながらも、まだ追跡してくるミサイルを菜月は残った左腕に持ったマシンガンで、叩き落としていった。 いきなりの大加速で、かなりのミサイルのロックを外したが、それでも大小三十ほどが着いてきている。

「正面、距離七〇〇。 敵三機くらい！」

「報告は詳しくして」

シルバー号に一切のレーダーは積まれていない。 と、いうよりもこのチームにレーダーを搭載している機体は菜月のみだ。 ミサイルを撃ち落しながら、必死にレーダーを確認する。

「え、えっと、固まってる！ とにかく固まってるよ！」

「……そう」

「無理だよ、射撃と管制を同時なんてさ！」

「それより撃つよ」

と、きいろが言った瞬間には撃っていた。

音というより、それは振動としか感じられなかった。身体を震わせる轟音。僅か一二〇〇の距離。菜月の思考が追いつかない時間の中で着弾、三発。

レールガン方式の砲撃は異常としか言いようのない連射を可能にする。フルに連射をすれば、二秒で弾薬が尽きるほど。

その速射性と一瞬で森を更地に変えてしまうだけの爆発力は、二足歩行型の機体を中心のバーサスゴッドの中で、シルバー号は最も人気のある戦車型の一つだ。

「二機撃破！ 残り一機は」

「目の前、轢く」

恐ろしい宣言を聞いた、と思った瞬間、あまり聞きたくない類の激音。レーダーから進路上に敵影無しの報告あり。

「……いやさ、いいんだけどさ」

「何？」

アクセルを緩める気など一切無かったであろうきいろが、菜月には恐ろしい。昔はあんなに優しい子だったのに……と嘆くと同時に、追ってきたミサイルを全弾撃墜。

「よし！」「あ、ごめん」

声は同時だった。

ごっん、と鈍い音が背中から聞こえた。何？と考えるより、身

体は勝手に操縦桿を操作し、機体に受け身を取らせていた。

「木が」

普段は無感情なきいろの声色に、わずかに申し訳なさそうな声が乗っていた。

オブジェクトとして配置されている木を、自然保護団体がマジ切れしそうな勢いで轢いていたきいろだが、シルバー号に轢いた木を乗り上げさせる事はなかった。

しかし、猿も木から落ちる、とでも言うべきか。さすがに木と敵の機体を轢くのは勝手が違ったのか、敵を轢殺した影響は僅かにシルバー号の安定を奪ってしまい、それまでコントロールして薙ぎ倒していた木が車体に取り上げ、菜月の機体に当たってしまった。背中に盾を回していたお陰で、ダメージは少ないが問題が一つ。

「あれ、これ敵のど真ん中じゃない？」

馬から落ちた間抜けを始末しようと、残っていた敵全てが菜月に向かっていた。

頼りになる味方は、すでに遙か彼方。シルバー号は最高速度は速いが、初速と減速と旋回性が非常に悪い、直線のハイウェイ専用。つまり、きいろが戻って来るまで、かなり時間がかかる。

「詰んだっばい!？」

片腕を無くしている上、菜月の機体は元々しょぼくれている。バーサスゴッドは一チームにつき、千のコストが与えられており、その中で構成しなければならぬ。

きいろのシルバー号が四百、赤矢が五百、菜月は百。

量産機の傑作（という設定）であり、豊富な武装（ただし、最大

の攻撃力を持つバズーカ、しかも最大弾数十発〓高コスト機の牽制用の副武装並みの攻撃力）を持つ機体。
その名を、

「が、頑張ろう、ザム！」

別名、初心者殺しの動く棺桶である。

二話目なのにフェードアウト

ザム、という機体にまつわる逸話が多い。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗って見たら、やたら多い起動シークエンスで動けないままに終わった。バーサスゴッドはこのような場合でも、遠慮容赦なく敵から攻撃が来る。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗って見たら、装甲が薄すぎて僅かにかすただけでザム大破。バーサスゴッドではきっちり全て避けてもらう事で、プレイヤーに対応してもらう方針だ。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗って見たら、悲しくなるほどの豆鉄砲で、全弾相手に当てても落ちなかった。バーサスゴッドはそのような場合、最初から上手く相手の装甲の隙間に当てるか、武器を捨てて素手での戦闘を推奨している。

露骨に地面から顔を出し、丁寧にデコレーションされている地雷それがバーサスゴッドでのザムの一般的な評価だ。産業廃棄物ですらなく、ネタ以外では誰も使わない。

しかし、初めてプレイした時から青野 菜月はザムに乗り続けている。

癖の無い操縦感、菜月の思った通りの動きをするし、物足りないどころか、動いている気がしないと言われる加速はビビリの菜月でも怖くない。弾に当たりそうなら、最初から撃たれないような立ち回りを心掛ければいい。でも、さすがに攻撃力の無さだけは何も言えない。

菜月の乗っているザムは、百戦連続で同機体に乗り続けたボーナスで、指揮官専用ザムにアップグレードされている。

丸っこい頭に一本、ひよろつとした角のようなアンテナが立っていて、貧弱なフレームは僅かに剛性がアップ。推力も雀の涙ほど増えた。レーダーの性能がバランス型の高コスト機並みに上がった。

た事だけが救いだ。

全体的に丸みを帯びたザムのボディは何とも可愛らしく、菜月は携帯のストラップにしまったほどだ。

こんなにもザムは可愛いのだから、もっとザム乗りが増えてもいいと思うが、日本全国を探しても指揮官専用ザムを持っているのは現時点で青野 菜月ただ一人。

通常、緑のザムが艶のあるパールホワイトになっていて実質、菜月専用ザムとなっている。

カラーリング設定はAランカーのみの特権だが、Cランクに上がった時点で菜月は専用カラーリングを持つザム乗りとして一躍有名になった。 ネタ的な意味で。

日本で最もザムを愛している女だと、絶対的に認められている菜月ではあるが、

「さすがにこんな状況、ザムじゃ無理！」

赤矢の挑発の怒りが全て菜月めがけて飛んでくる。 砲弾、銃弾選り取り見取り。

既にマシンガンは捨てていた。 上手く装甲の隙間にでも当たらない限り意味がない牽制にもならないマシンガンより、シールドを手にした方がよほどマシだ。

一瞬の間もないほど、シールドにがつっんがつっんとぶつかる音が響き続ける。

撃ってくる敵と菜月の間に別な敵を挟み込むように、背中のパニアを必死に吹かして移動し、何とか少しでも攻撃の手が緩むように手を打ち続ける。

元々、バトルロイヤルだ。 下手に菜月に接近戦を仕掛けて仕留めようとすれば、他のチームから菜月ごとまとめて撃たれかねない。 しかも、ザム相手に弾薬を使い切る事も後を考えれば不利だ。 その二点が何とか菜月の撃墜を防いでいた。

伊達にザムでBランクに上がったわけではない。ギリギリの拮抗を作り出す駆け引きと嫌になるほどしつこい防御は、菜月が沢山の撃墜の中から学んだ事だ。

「じれったい、ですわね」

「うえっ!？」

しかし、その駆け引きもあくまで、相手が乗ってくれているからだ。僅かに踏み越える誰かがいれば、菜月の小賢しい駆け引きなどご破算となる。

モニターにポップアップ。セツトに時間かかっているんだろう、といつも思うドリルのような縦ロールが印象的な女の姿。

「鳥井トリノ!」

「菜月さん、今日こそアナタを落とさせてもらいますわ! ウィンドノーツの力、見るがいいですわ!」

同時期にBランカーとなったトリノのチーム『ウィンドノーツ』と、菜月のチーム『SUNZU River』は公式戦だけで三度、通常戦だけで八度目の対戦が組まれていた。

そのたびにエースであるトリノから、必死に生き延びて菜月が時間を稼ぎ、残り二機がきいると赤矢に撃墜されるパターンを繰り返している。十一戦十一勝、被撃墜〇というパーフェクトな状況だ。しかし、鳥井トリノは甘くない。その事は菜月がよく知っている。

「あんたの力はよくわかってるから、もう来ないでよ!？」

「問答無用です！」

ウインドノーツの基本戦闘パターンは、シンプル極まりない。三機の空戦用機体『ウインドノーツ』による一撃離脱戦法だ。

「止めてみなさい、わたくしの終生のライバル！」

「勝手にそんなものにしないでよ！？」

ウインドノーツは空を飛ぶために装甲がザム並みに薄い。しかし、ザムは飛べない。

その装甲はザムのマシンガンでも撃ち抜ける程度で、いつもの対戦では適当に牽制しながら必死に逃げ惑うという方法が出来た。

それも今はマシンガンを捨てたせいで出来ない。

トリノのウインドノーツは既に菜月の頭上を取っている。高度三〇〇〇。プテラノドンによく似た、黒地に金のラインが入った機影が、翼を折り畳んだ。

重力にその身を預け、全力でバーニアを吹かす。一瞬で高度を千縮めたウインドノーツ。菜月のザムは、正面の十二機からロツクオンされていると警報を鳴らした。

ウインドノーツのエースであるトリノごとまとめて撃とうという構えだろう。チーム・ウインドノーツはトリノが一人でチーム撃墜数八割を稼ぎ出すワンマンチームだ。その腕は一人ならAランクに上がっているだろう。

銃弾は恐らくシールドで止められる。ザムは壊れてもシールドが壊れた事はないほどだ。

しかし、水平方向にシールドを向ければ、頭上から絶対にウインドノーツに仕留められる。

ウインドノーツにシールドを向ければ、ひよっとしたら、もしか

したら、万が一、生き残れるかもしれない。

そして、ここで下手に動けば周りにいる機体から無防備な背中を撃たれ、撃墜されてしまう。

菜月を仕留める事だけを見れば、トリノは最高のタイミングで動いていた。昇格を逃してでも、菜月を仕留めるという覚悟。

「ごめんなさいね、皆さん。　わたくし菜月さんを倒さなければ前には進めませんの！」

「いいえ、我々は」

「トリノ様の御心のままに！」

取り巻きA、Bとしか菜月は覚えていないウインドノーツの二人が何かを言っているが、そのよくわからない忠誠心には引くしかない。

「わたくし達の想いを受け止めなさい、菜月さん！」

「すっごい迷惑！」

覚悟を決めた。　菜月はザムの残された腕を頭上に掲げた。少しでも生き残りを図ろうと、シールドの角度を斜めにし、力を受け流そうとする。

ロックオン警報はやかましいくらいに鳴り続け、次の瞬間にはザムは蜂の巣になる未来が待っている。

——このままでは、だ。

レーダーに映っていた機影が、一つ消えた。

「裏切りだ！ 一人やられた！」

その声は菜月には聞き覚えがあった。 赤矢の声だ。

「誰だ！？ 誰がやった！」

「お前らか！」

怒りにより結び付いていた結束は一瞬にして崩壊。 攻撃力を失ったザムなどに照準を向けている暇はない。

互いに銃口を向けあう彼らは即発砲。 ザムを追うために接近していたせいで、中近距離戦とも言うべき正面からのインファントが開始される。

銃弾を避けられるだけの距離もなく、阿鼻叫喚の相打ち地獄。

「だけど、そんな事は知った事じゃありませんのオオオオオ！」

「いやあああああああ！？」

ウィンドノーツの大加速パワーダイブは、自らを弾丸と化す一撃。 激突、トラックが壁に正面衝突したような破壊音。 しかし、トリノは手応えを感じていなかった。

刹那の交差の後は再び離れる距離がある。 トリノが背後を振り返れば、左腕が引きちぎられ、右足も半ばから折れたザムの無残な姿。

それでもザムの健在を示すマーカーは点ったままだ。　まだ菜月は健在。　立てもしないだろうが。

「トドメ、行きますわよ!」

「させない」

「あ、あらあ!?!」

どこからか飛んできた機銃弾が、旋回に入ろうとして速度を落としたウインドノーツの翼を掠める。　バランスを崩したウインドノーツはそのまま墜落コースへ。

「お、覚えてらっしゃい!」

「うるさい」

いつの間にか戻ってきていたきいろとシルバー号は砲身の角度を上げる。

「鴨撃ち、もらっ」

銃火が見える場所へ大口径の砲弾を乱射。　必死に戦っていたチームの大多数は正面の敵に気を取られ、避けられずに哀れ木っ端みじん。

「快感」

と、棒読みできいろは言った。

「なんなんだ、このふざけた展開！」

きいろの砲弾から運良く逃れた者も何人かいた。これで三度目のAランク昇格戦の彼は、チームの仲間達と必死に特訓をしてきた。

「この試合が終わったら、俺……転校するんだ」

そう言った仲間は何も出来ないまま、どこから飛んで来た砲弾に吹き飛ばされた。最高の仲間達と最後に最高のゲームをしようぜ。そう誓ったはずなのに。

「ちくしょう、最悪じゃないか！」

「おい、待てよ。そいつは聞き捨てならねえなあ」

「誰だ！？」

レーダーには反応がない。どこか遠くから通信が入ったのか？
彼が考えた瞬間だった。

「逆に考えるよ」

彼の乗った機体の胸に穴が空いた。何故？と思った瞬間、何も無かった空間に赤錆のような不気味な色が浮かび上がった。

「ステルス！？」

「今はそんな事はどうでもいい。まずは俺の話を聞けって」

胸から腕が飛び出していた。細い、それでいてひよろりと長い腕だ。

その腕の先には、不釣り合いなほど巨大な五本の鋭い爪。更にその爪先には、

「おい、待てよ。それは俺のエンジン……！」

「こういう時は……勝負はまだまだこれからだ。面白くなってきたぜ！ってな」

爪の先に刺さっていた機体のエンジン。器用に指先の動きだけで、その手にすっぽりと収めると、

「まあそいつも俺とラスティネイルの前じゃ、何の意味もないんだけどよ」

ぐしゃり、と潰された。

「この……！ 卑怯者！」

腕が引き抜かれ、支えと動力を失った機体が崩れ落ちていく。

「そいつは最高の褒め言葉だな」

崩れ落ちる事すら許される事なく、斎藤赤矢のラスティネイルの爪が振るわれた。

「兄さん」

「おう。 どうした、きいろ」

にこやかに敵の機体を切り刻み終わった、赤矢のラスティネイルに通信が入った。

真っ直ぐ立っていても、腕が地面に着くほどの異形は、極限までレーザーに捉えにくい、光学迷彩が乗りやすい物質で作られている。しかし、その代償に絶対的な脆さを得てしまった。

下手な射撃武器を持てば反動だけで碎けるフレームと、どんな装甲も一撃で貫く馬力、そのせいで繊細に操作しなければ歩くだけで手足が折れる超ピーキーな操作系、格好よさも可愛さも感じられないデザインはバーサスゴッドに登場する機体の中で、三年連続で不人気ナンバーワンとなっている。

「敵は残り三機前後のようです」

「よし、じゃあいっちょ俺達、兄弟の絆の力とやらを見せてやるとすっか」

何が楽しいのか、ギャハハと下品な笑いを上げる赤矢に、きいろは何の感情の色も乗せずに言った。

「はい、兄妹連携です」

「いつもの通り、お前が陽動」

「兄さんが仕留める、です」

十分後、勝者を告げる声が参加者に告げられた。

勝者SUNZU River。被撃墜〇。撃墜数十三の堂々たる戦績でのAランク昇格である。

三話目だろつと集中砲火

「ね、しょ?」

「だから俺は疲れてるんだって……」

「いつもそう言って付き合ってくれないでしょ。今日だけ。今日だけ付き合ってよ」

「……兄さん、このままだとずっと言われ続けます」

「うん! 私、ずっと言うよ! ずっと言うよ!」

「うぜえ……わかったよ」

「やった!」

三人はまだバーサスゴッドの筐体の中にいた。モニターにはつらつと文章が並んでいる。

『特殊グランドクエスト・「神への挑戦」が発生しました。条件・Aランク昇格戦で被撃墜○』

「俺、あんまりCOM戦好きじゃねーんだけど」

「私はたまになっちゃんに付き合ってます」

バーサスゴッドはコンピューターを相手にするオフライン専用モードも用意されている。こちらのモードもウロボロス社が力を入

れて作っているだけあり、派手な演出がプレイヤーを楽しませてくれる。

オフライン専門のプレイヤーもいるほどだが、発売から三年経った今でもクリアされていない。

「あ、ちよつと待つてね。 W i k i に書き込んでから」

菜月はそう言うつと携帯を操作し、攻略サイトに書き込みを始めた。グランドクエストと呼ばれるメインストーリーを楽しむクエストだけでも、現在わかつているだけで六千を超える。

様々な条件により、ルートが分岐しストーリー自体が多彩に変化するのだ。

菜月は赤矢ときいろがいなければ、延々とクエストを進めている。

「なんつーか、テンション上がんねえんだよな、クエストって」

「クエストだとザムのマシンガンでも相手を倒せますから」

「……対人戦の憂さ晴らしかよ」

「終わったよー！ あはー、三人でクエストとか久しぶりだよねえ。えへへ、赤矢がいるのっていつぶり？ いつぶり？」

テンションが上がりきった菜月に、赤矢のテンションは地の底まで下がりきった。

「なんだよ、そのノリ……」

「初めて特殊ルート見つけたんだもん！ Bランク以下だと、もう探し尽くされて見つからなかったから、W i k i に書き込み出来な

かったの！　すっごいしてみたかったの！」

「さよか」

普段は傍若無人を絵に書いたような赤矢だが、やはり彼も男である。興奮した女性に逆らう愚かさは、よく知っている。

言葉少なに返事をするだけに留めた。

「よし、じゃあクエスト受」

「待て、菜月」

しかし、喜び勇んでクエスト受注を選ぼうとした菜月を、赤矢は止めた。

「え、やっぱりやめたとか？」

「今更そんな事は言わねえよ。　まあ俺の話を聞け」

真剣な顔をしている赤矢に菜月は唾を飲んだ。さすがにさっきの態度は高校生としてあれだったか、と落ち着いた頭で思い返した。普段からろくでもない事ばかりしている赤矢に、説教の一つでもされた日には一生の恥だ。

「俺が受注ボタンを押す」

右手の親指でわざわざ自分を指し、妙にいい顔をしながら赤矢は言った。

「やだ」

先ほどの反省はなんだったのか。　しかし、菜月にも譲れない事がある。

「私が押すの」

「こういうのはリーダーの仕事だろ」

「はあ？　あんたがリーダーとか有り得ないでしょ」

「は？　じゃあ菜月、お前がリーダーなのか？　それこそ有り得ないだろ」

二人の意地と意地がぶつかり合う。　それは端から見れば、馬鹿馬鹿しい事だ。

しかし、菜月には菜月の言い分があり、赤矢には赤矢の言い分があった。

『あの、すみません。　プレイするなら早くして欲しいんですけど……』

「ごめんなさい」

ゲームセンターの店員から怒られたきいろは、受注ボタンをぱちつと押した。

「あ、きいろ！？」

「きーちゃん！？」

「二人とも大人気ないです」

年下の女の子から、ぐうの音も出ないほどの正論を言われた二人は黙った。

「それより機体立ち上げを始めましょう」

「はい……」

ぶすくれる菜月に、

「初めてなっちゃんが見つけた特殊クエストなんだよね」

「そうだよ！ あはー、頑張って色々書き込むために、調べなきゃね！」

再びテンションを上げた菜月は、猛烈な勢いで機体の立ち上げを始めた。

「兄さん」

「あ？」

きいろは菜月側への音声送信をカットした。

「私は兄さんがリーダーだってわかってます」

だるそうにしていた赤矢の表情は一変。にへらとだらしない笑みを浮かべた。

「だよな、さすがきいろは俺の妹だ。　よく俺の事がわかってるぜ！」

「はい」

きいろは世の中には言わなくてもいい事があるのを、よく理解していた。

「そういえば赤矢、ウロボロス社にハッキングしたとか言ってた？」

立ち上げが終わり、モニターと機材に明かりが灯ったコクピットの中で、菜月がふと思い出したかのように言った。

「ああ、やった」

「……え、それって大丈夫なの？」

「あの会社、盛り上がりゃ大抵の事は許してくれんだよ」

「そんなのでいいんだ」

「あとハッキングルートも提出してきたからな」

企業だけではなく、警察などでもハッカーを雇い、ハッカーをする事はよくある。赤矢のように趣味でハッキングをするが、特に被害を出さないハッカーは被害届を出して逮捕させるより、内に取り込んだ方が役に立つのだ。

「よくわかんないなあ」

「いいから気合い入れ直せよ。クエストだからって、俺がリーダーのSUNZU Riverが負けるのは許せねえ」

「え、だからあんたがリーダーって」

「なっちゃん、始まる」

その場所は荒野だった。草木がまばらに生えているだけ。起伏もなく、シンプルな戦場。

「あれ、状況説明とかなし？」

通常、クエストを受けると状況説明やちょっとしたストーリーが流れるのだが、何も起きない。

菜月のお気に入りのキャラクターであるお髭が可愛い司令官が出てこなかった事に、少し寂しさを覚えながら、菜月は行動を開始する。

前の戦闘での破損が修復されている事を確認した菜月は、ザムを立ち上がらせた。特殊クエストという事で、昇格戦の状況を引き継いだままという可能性も考えていたのだ。

さすがに四肢がもげ、武器もシールドもないまま戦場に放りこまれては泣くしかない。

「さーて、敵はどこかなー」

リーダーを操作しようとする菜月に赤矢が声をかけた。

「菜月、後ろ後ろー！」

「え？」

ザムを振り返らせてみれば敵、敵、敵。

すでにアサルトライフルを構えた機体が百以上。レーダーを見てみれば、敵影を示す光点で真っ赤に染まっている。

ドラム缶に、蛙に似た丸みを帯びた頭を付け、ぞんざいに取り付けられたとしか思えない短い手足。クエストモード専用の機体『フロッグスケルトン』

何がスケルトンなのかはよくわからないが、ミルキーブラウンの機体色から来ているのだらうと、菜月は勝手に思っている。

ザムのマシンガンでも貫通する薄い装甲で、初心者でも安心な雑魚だが、これはさすがに数が多過ぎた。

「なにこれー！？」

「なっちゃん、早く逃げて」

きいろの声に従い、フロッグスケルトン部隊が集まっている方向きながら、菜月はスラスターを吹かし、後ろ向きに滑空を始める。しょぼくれた推力だが、それでも歩くよりは早い。

「あれ、ところでなんでそんなに後ろにいるの？」

いつの間にか菜月の後方、距離七〇〇にシルバー号。赤矢のラストイネルはステルスを開始したのか、どこにも見当たらない。

「……基本の戦闘パターン」

「どついう事……？」

フロッグスケルトンがここに来て、初めて動きを見せた。手にした銃口は一点を向く。

「あ」

「ごめん。頑張つて生き延びて」

ラストイネイルはどこにいるかわからない。シルバー号を狙つても、距離が遠くフロッグスケルトンのアサルトライフルでは、その装甲を貫けないだろう。

つまり、フロッグスケルトンの狙いは一点になる。

「私、囧!？」

菜月の悲痛な叫びと同時に、フロッグスケルトンのアサルトライフルが一斉に火を吹いた。

三話目だろつと集中砲火（後書き）

ご意見、感想、評価、お気に入り、不満その他もろもろお待ちしております。

四話目って何かおかしい？

まるで扇のような形になっていた。外縁のフロッグスケルトンから、要の菜月へと間断無く銃弾が撃ち込まれる。

右へ左へ、ちまちまと移動しながら菜月は必死に撃ち返した。

シールドの影に隠れているせいで、しっかりと相手を見る余裕がなかったために、とりあえず相手のいる方向に目掛けて適当にマシンガン撃っているだけだが。

何の因果でザムのような弱小機体で囲っているのか、と菜月自身も思わなくはないが、実のところチームSUNZU Riverには他の選択肢はない。

きいろのシルバー号は接近戦では戦えず、赤矢のラスティネイルは接近戦以外は出来ない。

その点、ザムなら一応は射撃武器を持ち、一応は接近戦用の武器もある。全てが非常に低レベルで纏まった良機体、それがザムである。

「きーちゃん、一気にどかーん！っていけない？」

「無理」

シルバー号がいくら火力重視であろうと、百機以上のフロッグスケルトン部隊を吹き飛ばせるほどではない。相手もただの木偶ではないらしく、散開して一機ごとに距離を取っている。

相手が三機編成の対人戦の場合ならかまわないが、一山いくらのフロッグスケルトンを砲弾一発と引き換えにするには弾数が足りない。

「なっちゃん、頑張って引き付けて」

「もう無理！」

「だよね」

二機か三機ほどで菜月の横に回り込もうと動く小部隊が度々、出てきている。正面からならザムのシールドは、シルバー号の砲撃すら耐えるが横から無防備な脇腹を撃たれてしまえば、濡れた和紙を千切るようにして落ちてしまうだろう。

小部隊が出るたびにきいろは機先を制して砲撃を加えるしかない。貴重な砲弾を使うしかない。

「これがNPCの戦い方？」

「だよね、何か違うと思う」

菜月は言いようのない違和感をずっと感じ続けていた。VR技術が発達しても、リアルタイムで相手に合わせた戦術をコンピューターが考えるのは難しい。

しかし、目の前のフロッグスケルトンは確かに戦術に似た何かを駆使している。

「少し前に出る。機銃で落とす」

「大丈夫？」

「大丈夫、相手の射程には入らない」

きいろが苛立っているのに、菜月は気付いた。ベトナム戦争で車に備え付けられた機銃を使い、長距離から狙撃

したという記録がある。シルバー号でもフルオートから、三発だけを撃つ三点バーストモードにすれば、無駄撃ちする事なく狙撃が出来て、砲弾を節約する事が出来るはずだ。

「……無理しないでね？」

しかし、菜月は違和感が消えない。何か当たり前の事を見逃しているのではないか。そんな気がしてならないのだ。

風が吹いていた。風は東から西へと流れている。

「大丈夫、狙撃は得意」

シルバー号が前に出ると同時に、再び三機が一塊となって前に出てきた。砲撃を加えれば、まとめて吹き飛ばせるチャンスではあるが、きいろは足を止めて機銃を使う方を選んだらしい。

必死に短い足を動かし、距離を詰めようとするフロッグスケルトンに、きいろは慎重に照準を合わせる。

距離は敵のアサルトライフルでは届かないが、シルバー号の機銃ならぎりぎり届く距離。

「当たる」

きいろにはその確信があった。一方的な鴨撃ちにプレッシャーを感じるはずもなく、引き金を引いた。

砲身の横に備え付けられた機銃から、三発の銃弾が放たれる。

その凶悪な威力は当たれば、フロッグスケルトンを無残な姿に変える事だろう。

「嘘!？」

しかし、外れた。 撃った瞬間、必中の確信を得ていたきいろは一瞬の忘我に陥る。

弾が何かに流されるように曲がった。 バリア装置を持っていないはずのフロッグスケルトンが、どうやって？
その疑問は行動に遅滞を生んだ。

「きーちゃん、下がって！」

菜月の言葉は、菜月に出来る最速だっただろう。 しかし、全ては遅かった。

フロッグスケルトンはこれまでアサルトライフルしか持っていなかった。 撃破済みの機体も確かにそうだった。
だが今回、前に出てきた三機は背中にバズー力を隠し持ち、このタイミングで両腕に構えた。

「……………っ！」

足を止めていたシルバー号は動けない。 発射されたバズー力は三発ともがシルバー号への直撃コース。

必死に機銃でバズー力を撃ち落とそうと乱射。 一発は機銃の弾幕に捉える事に成功、爆散。
しかし、

「きーちゃん！」

残り二発はシルバー号の車体に見事に命中した。 黒々とした煙を上げるシルバー号に向かって、菜月はザムを飛ばした。

いつもなら安心感すら得る遅々とした加速が、今に限っては苛立ちの元だ。

二射目を撃ち込もうと、狙いを安定させるため膝を付いた小部隊

の真ん中に、ザム虎の子一発こっきりの手榴弾を投げ込む。地面にぶつかり、わずかにバウンドした手榴弾は、一瞬の後に破裂し、三機を吹き飛ばした。

「きーちゃん、無事!？」

きいろの機体の状況を、菜月は聞いた。

バーサスゴッドはゲームだ。最悪の場合、シルバー号ときいろを見捨てて菜月一人逃げる必要があるかもしれない。ゲームなりの合理性がある。

しかし、それでも菜月とザムは、シルバー号の前に立った。

「無事じゃないかも……」

通信に出たきいろの頭から、真っ赤な血が流れ出していた。

「どうしたの、それ!？」

「当たったら凄い揺れて……頭ぶつけた」

脳震盪でも起こしたのか、朦朧としたまま、きいろは答えた。

バーサスゴッドでも多少の振動はあるが、通常はこのように怪我をする振動はありえないはずだ。

「きーちゃん、ギブアップするよ!」

「ごめん……」

「ゲームより、きーちゃんの方が大事に決まってるじゃない!」

そんな当たり前の事を言うきいろに、腹を立てながら菜月はギブアップのボタンを呼び出し、押した。

「……ごめん」

「ゲームより、きーちゃんの方が大事だもん」

そんな下らない事で謝られるのは心外でもあり、こんな風に怪我をする作りにしたバーサスゴッド、ひいてはウロボロス社への怒りが菜月の声に乗っていた。

特殊クエストは二度と発生しないかもしれないが、大切な友人を怪我させたまま続けようと、菜月はまったく思わなかった。

「今ぞ、突撃イイイイイイ！」

しかし、そんな菜月の怒りなど、吹き飛ばすような大音声が戦場に響く。銃火の中でもはつきりと、機械で増幅された音特有のノイズもなく、野太い肉声が戦場を動かした。

「え、え！？」

菜月の戸惑いを無視して、フロッグスケルトンの大部隊が一斉に動き始めた。

シルバー号の砲が半ばからへし折れている今、確かに敵から見ればチャンスなのだろう。しかし、すでにギブアップはしたはずだ。

「どつという事！？」

通信の向こうではよほど辛いのか、唇を噛み苦痛を堪えるきいろの姿。目は明らかに焦点が合っていない。きいろは動かせる状

態ではなかった。

いつログアウトが出来るかはわからないが、

「やるしかないじゃない！」

菜月はシルバー号の前の地面にシールドを突き刺した。シールド上部にマシンガンの銃身を乗せ、反動を抑える支えとし、正確な射撃を求める構えを取った。

菜月に必中を期待出来る腕はないが、敵は津波のように押し寄せる雑兵の群れ。

適当にトリガーを引き絞るだけで、避けも防げもしないフロッグスケルトンは数機まとめて撃ち抜かれる。

勝利条件はきいろに三発目の被弾を許さない事。目視でバズー力を構えた相手を集中的に狙っていく。またきいろに怪我をさせるわけにはいかない。

その決意は、あっさりと二十機ほど菜月にフロッグスケルトンを撃破させた。このまま行けば一人でフロッグスケルトンを殲滅出来るであろう。

「うりゃうりゃうりゃうりゃー！……って弾切れ！」

しかし、火力に優れるシルバー号でも、単機で殲滅するのは不可能だった敵の数。津波を多少、砕こうとも何の意味もない。

焦燥感がザムの手元を狂わせ、マシンガンの弾倉を取りこぼしてしまう。

「落ちて着け落ちて着け私……！」

腰の後ろから最後の弾倉を取り出し、今度こそ交換に成功。しかし時間にして三秒も経っていない。が、残った三十はいるであ

ろうフロッグスケルトンの群れは、大きく距離を詰めていた。

この弾倉を使い切ってしまったら、次はないだろう。一応、接近戦用のサーベルはあるが、そんな事をしている間にシルバー号が、きいろが撃たれる。

「ど、どうしよう!？」

「こうする!」

真っ赤に染まったレーダーに、青い光点が一つ。突撃してきた部隊の後方に待機していた三十機ほどの塊。そのど真ん中に赤矢は現れた。

「くそつ、避けやがった!」

「殺気が漏れておったわ! しかし、この距離まで近付いてみせるとは見事なり!」

フロッグスケルトンに隠れるようにしていた、雑としか言いようのないフロッグスケルトンとは違い、丁寧な作りの西洋甲冑をそのまま大きくしたような機体が、滑らかなサイドステップで、ラストイネイルの右の突きを避けた。

必殺の一撃を避けられ、大きく体勢を崩したラストイネイルに、西洋甲冑が姿に見合ったランスの刺突を送り込む。

「我が槍、馳走してくれる!」

異常に腕の長い構造を生かし、左腕で地面を突き刺し、その反動でラストイネイルは横に転がる。

「貴様ら、我々を誰だと思っている！ 我々は」

「赤矢！ きーちゃんが怪我した！ ギブアップも出来ない！」

ステルス中は通信が不可能になる。 ステルスを解除した赤矢に、菜月の声がやっと届いた。

「なんだと……！」

赤矢は決意した。

「てめえら皆殺しだ！ ログアウトしたら絶対にウロボロス社も叩き潰してやる！」

「ぬう！？ 戦場で掠り傷で喚きおつて！」

馬鹿の一つ覚えのような右腕での突きが、甲冑の心臓を狙う。だが、その怒りに満ちた突きは、ただただ速い。

「だが、防げぬほどでは！」

「だろうな」

甲冑は両手で構えたランスを突きの軌道上に乗せる事に成功。しかし、ラスティネイルの腕は一本ではない。

左腕をコンパクトに回し、爪先で、甲冑の両腕を切り落とした。

「何という業物……我が甲冑がこんなにもあつさりと！？」

再度、放たれたラスティネイルの突きは、両腕を失った甲冑に避

ける事を許さなかった。

「おうよ。俺の自慢のラスティネイル、存分に味わえ！」

甲冑の腹の中身は赤。 絵の具でもぶちまけたかのように、辺り一面に赤い色が広がった。

甲冑を仕留めた赤矢は即座に後方へと跳躍。 指揮官と戦っている間はお互いに討ちを恐れて撃てない。 だが、お互いに討ちを恐れる必要のなくなった敵は、即座に赤矢を穴あきチーズにしてやろうと銃弾が山のように撃ち込まれるはずだった。

「なんだそりゃ……？」

しかし、赤矢を襲ったのは銃弾ではなかった。 ドラム缶を倒したかのような、がしゃんという音が連続して続く。 残った全てのフロッグスケルトンが、いきなり骨を抜かれたかのように倒れていた。

銃声が消え、奇妙な沈黙が辺りを支配した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194y/>

バーサスゴッド・オフライン

2011年11月26日23時46分発行